

# 神戸モスク建立

—昭和戦前期の在神ムスリムによる日本初のモスク建立事業<sup>(1)</sup>—

福田 義 昭

## 序

非ムスリム社会におけるモスク建立事業は、当該ムスリム・コミュニティの歴史や性格を知る上でも、またイスラムや広く異文化に対するホスト社会の考え方を知る上でも、興味深い考察対象である。しかし、日本のモスクを扱った研究はまだ十分には行われていない。日本におけるモスク建立事業は1930年代の第一波と1990年代以降の第二波に大きく分けられ、後者については、最近、社会学的な調査・研究の成果が幾つか発表されている<sup>(2)</sup>。他方、前者は様々な文献で言及されているものの、不十分・不正確な記述や偏りも目立つ。

筆者の考えでは、戦前の事例に関する問題は一般に次のような点にある。

(1) 事実関係の未確認：戦前・戦中期の日本・イスラム関係については、最近研究が盛んになり、多くの事実が明るみに出されつつある。しかしモスクに関しては、まだ確認・公表されていないことも多い。戦前に建てられたモスクは、仮設礼拝所等を除いて三つあるが、東京モスクに関心が集中するため、他の二つ、神戸と名古屋のモスクに関する情報が少ない。設立年に関する謬説が流布しているのは、その現われの一つだろう<sup>(3)</sup>。

(2) 国策的文脈への偏り：東京モスクが国策的文脈の中で、日本側の資金供与により建設されたことはよく知られている<sup>(4)</sup>。1930年代から日本の敗戦までの対イスラム関係については、そうした「回教政策」が強調されてきたた

め、他の二つのモスクも一絡げに論じられることがある。だが、神戸や名古屋のモスクは、日本の援助に頼ることなく、国内外のムスリムの寄附によって自主的に建設された<sup>(5)</sup>。また、時代や在日タタール人の存在など共通要素は多いとしても、各ムスリム・コミュニティは民族構成や規模に違いがあった上、神戸と名古屋のコミュニティは、東京モスク建立に主導的役割を果たしたクルバンガリー（1889-1972）と敵対した。つまり、対日関係という点で東京モスクとは一線を画しており、それと区別なく論じることはできない。

(3) 研究の枠組みに由来する偏り：神戸モスクに関して言えば、従来は主として在日タタール人や在日インド人<sup>(6)</sup>に関する研究の中で触れられてきた。その際、タタール人の研究ではタタール人、インド人の研究ではインド人の役割が強調されすぎる場合もあった。無論、そのどちらでもないからといって客観性が無条件に保証されるわけではない。しかし、両者以外の関係者も含めて、よりバランスの取れた記述を目指す必要はある。

このような問題意識に発して、本稿は神戸モスク建立に関する次のような問いに具体的に答えることを目的とする。事業を主導したのは誰か。いかなる人々が参加し、それぞれどのような役割を果たしたのか。資金はいかにして調達されたのか。モスク建立は国内外でどのような反応を引き起こしたのか。できるだけ多様な関係者の視点からこれを見ることにより、モスクという象徴をめぐる様々な社会的力がどのよ

うに働いていたのかを素描してみたい。なお、モスク建立の前提となるムスリム・コミュニティの形成については、旧稿「神戸モスク建立前史——昭和戦前・戦中期における在神ムスリム・コミュニティの形成」(以下「旧稿」)で比較的詳しく紹介したので、ここでは繰り返さない<sup>(7)</sup>。

利用した主な史料は旧稿とほぼ同じである。まず、外務省外交史料館所蔵の「外務省記録」とりわけ「本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件／回教関係(大日本回教協會ヲ含ム)」全二巻<sup>(8)</sup>。戦前、警視総監や各府県知事(当時は内務官僚)から寄せられた国内各地のムスリムに関する報告、在外公館と本省のあいだでやり取りされた関連文書等が収められている。これにより、国内ムスリムの活動や、彼らへの日本側諸機関の対応、それに対する国外の反応等を大まかに知ることができる。神戸モスク建立に関しては、落成祝賀会に合わせて1935年10月にモスクが発行した記念冊子 *The Kobe Muslim Mosque: A Souvenir Booklet Issued in Commemoration of the Opening Ceremony of the Kobe Muslim Mosque* (48 p. 以下『モスク落慶記念冊子』)や、翌年4月に同モスクが発行した『神戸ムスリムモスク報告書』 *The Kobe Muslim Mosque Report 1935-6* (19 p. 以下『モスク報告書』)も当事者による貴重な史料である。また、英国外務省の日本関連文書の一部(British Foreign Office: Japan Correspondence, FO 371)も利用した。これにはインド系ムスリムに関する駐神英国領事らの報告が含まれる。その他、各種新聞(英字紙含む)等からも情報を得た。なお、在神ムスリム個々人に関しては、各種人名簿(『神戸市商工名鑑』や *Chronicle Directory, Kobe: The Japan Chronicle* など)の各年版などを参照しつつ(本文では特に断らずに)述べている箇所もある<sup>(9)</sup>。

## 1. 日本におけるモスク建立計画

日本でのモスク建立計画は神戸が最初ではな

い。最も早い計画は、おそらく東京におけるそれだろう。1909(明治42)年、一時来日中だった汎イスラム主義のタタール人学者アブデュルレシト・イブラヒム(Abdürreşid İbrahim, 1857-1944)の周辺でモスク建立計画が持ち上がっている<sup>(10)</sup>。計画を推進したのは、元陸軍中佐の大原武慶(1865-1933)<sup>(11)</sup>や大アジア主義者の中野常太郎(1866-1928)ら日本人協力者<sup>(12)</sup>、東京外国語学校のインド人教師で汎イスラム主義者のムハンマド・バルカトゥッラー(Mohammad Barkatullah, 1854-1927)、横浜在住のインド人商人らであった。しかし用地の確保まで進みながら、結局、この計画は頓挫した<sup>(13)</sup>。

1924(大正13)年のクルバンガリー来日後にも東京でモスク建立計画が立てられた。遅くとも1928(昭和3)年頃にはそうした決定がなされていたようである<sup>(14)</sup>。しかし、これも資金面の困難等から容易には実現しなかった。実際に東京モスクが完成するまでは、代わりに様々な場所が礼拝所として使われた<sup>(15)</sup>。1931年には代々木富ヶ谷に「回教徒小学校」が完成したが、これも当初はモスク建立計画の一部だったらしい<sup>(16)</sup>。附属学校として先行的に建設されたものの、結局モスク本体は建てられず、東京モスクが完成するまではこの小学校が礼拝所としても使用されていた。

名古屋モスクについても一言しておこう。小さな木造モスクで、戦前・戦中から有名ではなかったらしく、当時の資料でも、神戸や東京のモスクと並んで記されることは少ない。小村不二男の『日本イスラム史』に関連記事があり、戦災による焼失の様子を語る元隣人の証言など有益であるが、建造年については曖昧な伝聞の記憶から1931年と記している(299-302頁)。おそらくこれが元となり、謬説が流布したのだろう。実際には1936年11月に完成し、翌年1月に落成式が行われた。神戸モスクのそれと同じ体裁の落慶記念冊子、「名古屋トルコ・タタールイスラム教會」発行の *The Nagoya Muslim*

*Mosque: A Souvenir Booklet Issued in Commemoration of the Opening Ceremony of the Nagoya Muslim Mosque* (Jan. 1937, 24 p.)によると、同モスクは「一九三六年十一月中旬名古屋市東區今池町三丁目に建設され」、「一九三七年一月名古屋トルコ・タタールイスラム教會として立派に呱呱の聲を上げ」た(12頁)<sup>(17)</sup>。

このように、ある程度の数のムスリムがいた東京や名古屋でもモスク建立計画が立てられた。場合によっては、神戸より先にモスクができていても不思議ではなかっただろう。しかし、資金の問題などから実現が遅れた。結果的に、裕福なインド商人も多くいた神戸の計画が先に実現することになったわけである。

## 2. 神戸モスク建立計画

『モスク落慶記念冊子』(4頁)によると、神戸でモスク建立の必要性が真に認識されるようになったのは、第一次世界大戦中・大戦後に同地に居住するムスリムの数が増加し始めた頃だったという。しかし計画の具体化は、1928(昭和3)年にインド人貿易商ボチア(M. A. K. Bochia)が来神するのを待たねばならなかった。彼こそ、熱心な信者らの協力を得て事業に取りかかり、資金集めに着手した人物だった。

1929年5月のマフムード・バイラム・エジプト領事の来神は、一時的にせよ、この事業にさらなる推進力を与えた。同年11月にはモスク建立のための委員会(以下「モスク委員会」)が設立され、バイラムはその「会頭」に就任している<sup>(18)</sup>。1931年2月の兵庫県知事の報告には、次のようなくだりがある。

前記タタール族及印度人聯合ニ成ル回々教寺院建設ニ関シテハ数年前ヨリ在神該教徒間ニ高唱サレ前埃及領事「アフメット、ベーラム」在任当時ハ熱心ナル後援ヲ為シ建設委員ヲ設置シテ基金募集ニ着手シ「ベーラム」ハ自ラ本國埃及政府ニ補助金下附ノ運動ヲ為スコトヲ言明シ又印度人間ニ於テハ各在苗民ガ醸金

スル外印度本土ニアル宗徒ヨリモ最小額五万円位ノ寄贈ヲ得ルモノト豫想シ在神タタール族間ニアリテモ全国各地ニ在苗スル同族人ニ寄贈ヲ勧誘スル等建設運動ハ具体化シ居リタルガ〔……後略、傍点引用者〕<sup>(19)</sup>

国内外のインド系ムスリムやタタール人の寄附に加えて、エジプト政府の資金を導入することも考えられたわけである。この時点では、事業が半ば公的な性格を帯びる可能性もあったことになる。だが結局、バイラムの「言明」は空手形に終わったらしい。上記報告は続けて「偶々昨年〔1930年〕三月「ベーラム」領事ノ本國ニ引揚転任ト為リ且ツ一般財界不況等ノ事情ト相俟ツテ該運動ニ一大支障ヲ来シ一時頓挫ノ状態ニ」なつたと述べている。1931年2月にボチア邸で開催されたモスク委員会会合では、エジプト政府補助金の件に関し、当時米国にいたバイラムに照会状を送付する決議がなされている<sup>(20)</sup>。バイラムが離日して一年近く経った時点でも、まだ在神ムスリムらは同領事の約束に淡い期待をかけていたことがわかる。照会状の件がその後どうなったかは詳らかでない。しかし、補助金計画が破綻したことは明らかである。以後この件に関してバイラムの名が出ることはなく、『モスク落慶記念冊子』等でも一切言及されていない。バイラムは後任のファウズィー(旧稿参照)に一件を引き継がなかったのかもしれない。この新領事(当初は代理領事)は確かに一時期、バイラムの後を継いで委員会会長を務めたようだが<sup>(21)</sup>、すぐに会長職をボチアに引き継いでいる。こうした点からすると、この件はバイラム在任中に具体的進展を見なかったばかりか、彼の個人的企図以上のものには発展しなかったものとみられる。

恐慌による経済不況とエジプト人領事のインドシアタイプの立消えによって困難に直面したモスク建立事業は、しかし、大口の醸金を約したインド人商人たちのおかげで息を吹き返した。先の報告(注19参照)の続きにこうある。

最近印度商人「フロジディン」ハ建設費トシテ一千三百円ヲ醸出シ尚五千円ノ寄附豫約ヲ為シ又印度人「カリム、アフメット」モ多額ノ醸金ヲ為スコトヲ公約スルニ至リテ再ビ該運動ハ活氣ヲ呈スルニ至リ現在ニ於テ、約九千円ノ預金ノ他ニ寄附予約額ヲ合スレバ約二万円ニ達スル状況ニシテ近ク神戸市内ニ回々教寺院ノ建設モ実現可能トナリ〔……後略〕

フェローズッディン (Ferozuddin) は最終的に醸金総額 (12万円弱) の半分以上を一人で負担することになる人物である。彼の寄附がなければモスク建立事業は進展しなかったかもしれず、まさに立役者というにふさわしい。「カリム、アフメット」はアフメド・アブドゥル・カリム兄弟社 (Ahmed Abdul Karim Bros., Ltd.) のことだろう。この会社はボンベイ (ムンバイ) に本社を持ち神戸に支店を置いていたが、最終的に1万3000円余りを醸出し、またボンベイでの醸金窓口として3500円余りを集めて寄附することになる。これも大口の醸金者である。また上記報告には、当時、神戸トルコ・タタール協会がモスク建設基金に寄附する1160円を保管していたことも記録されている。決して裕福とは言えないタタール人が乏しい生活費を削ってこの頃から寄附金を準備していた様子が窺える。

同じ報告に見える当時のモスク委員会メンバーは、会長がエジプトの「ペーラム [=パイラム] 領事 (飯國<sup>(きこく)</sup>后欠員)」、副会長にインドの「カリム、ブツシユ [=ボチア]」、書記もインド人、書記補がタタール人、会計がインドの「カリム、アフメット」、理事は3人がタタール人、2人がインド人となっている。欠員となった会長を除き、インド人5名とタタール人4名からなっている。実質上の会長とも言えるボチアに加え、書記や会計など要職をインド人が占めると同時に、タタール人の面子も立てた構成である。

さて先述の1931年2月の会合では、照会状の

件以外に、次のようなことも決議された。(1) インドの「スタット、ハイダラバット王族ニシテ全世界回々教徒中ノ最富豪タル「ネザム」家 [=「ニザーム」はハイダラーバード藩王国の藩王の称号] ニ対シ文書ヲ以テ」寄附金を依頼すること。また、「欧露及土耳其古國ニ在ルタタール族ノ富豪並ニカルカッタ、ボンベイ、ラングーン、ヂユフトル、ボパール、シヨナツカ等ノ各地宗徒ニ文書ヲ以テ」寄附を依頼すること。(2) 翌3月15日の会合までに、北野町および布引町付近で150坪内外の候補地を探すこと。(3) 前記各文書の作成送付をタタール人およびインド人の委員に委任すること<sup>(22)</sup>。

この3月15日開催予定とされた会合に関する資料を筆者は見つけることができなかった。だが、同年5月4日付の兵庫県知事の報告にその後の進捗状況が記されている。それによると、4月29日にモスク委員会会合が開かれ、モスク敷地候補地である北野町2丁目の土地買収に関して協議を行った。土地価格は約2万円、モスク建設費には数万円が必要であり、「該委員團長印度人「カリム、ブツシユ」ハ寄附金募集ノ爲歸國ノ豫定」としている<sup>(23)</sup>。北野町にモスクが建てられることは結局なかったが、いずれにせよ土地購入費とモスク建設費を併せると、当時はまだ資金不足であることが明らかだった。そこで、ボチアが資金集めにインド本国を訪れることになったのだろう。

海外での資金調達に活躍した人物として『モスク落慶記念冊子』(4頁) が特に名を挙げているのはS. A. アフメド (S. A. Ahmed) である。彼は計画の推進に骨を折り、事業に多くの時間を捧げたが、モスクの完成を目にすることなく他界したという。『モスク報告書』(18頁) によると、彼が資金調達に派遣されたのはインドだけでなかった。英国の海峡植民地 (Straits Settlements) にも赴いている。しかし、帰日したときには病を得ており、回復することなく歿した。彼が集めた醸金の完全なリストと任務に要した費用に関する報告はついに入手できな

かったという。

ここで『モスク報告書』に掲げられた1936年3月末日までの醸金者リストを簡単に見ておこう（末尾の図を参照）。出自不詳の者もいるが、ほとんどインド系ムスリムによって占められているのがわかる<sup>(24)</sup>。醸金総額は11万8774円73銭で、先述の通り、フェローズッディンが半額以上の6万6000円を一人で出している。その他の大口の醸金者もほとんどインド人で、例外は経済的に困窮しながらも2510円を醸出した在阪神タタール人コミュニティと、500円を醸出した在京アフガニスタン公使タルズビーくらいかもしれない。ほかに今のところ判明しているインド系以外の醸金者としては、在朝鮮（大邱）のタタール人イスハク・アクチュリン（30円）、在神エジプト領事ファウズィー（200円）、シリア人商人イッサト・デビス（50円）、エジプト領事館員ファッラグ（5円）らがいる<sup>(25)</sup>。海外の醸金額は、ボンベイでアフメド・アブドゥル・カリム兄弟社を通じて3546円、ラングーン（現ヤンゴン）でアフメド・イブラヒム兄弟社（Ahmed Ebrahim Bros.）を通じて（同社分を除く）1万3521円81銭、さらにS. A. アフメドが海峡植民地で集めたのが625円で、ほかに海外（朝鮮を含む）から寄附されたとわかるのがスラバヤ、大邱、ラングーンから各一名の合計86円24銭、すべて合わせると1万7779円5銭となる。少なくとも醸金総額の約15パーセントが海外から集められたことになる。

以上は最終的な醸金額だが、ある程度の資金ができた1931（昭和6）年12月に敷地が購入された<sup>(26)</sup>。神戸区中山手通2丁目59-2の約122坪の土地である<sup>(27)</sup>。しかし、すぐに着工とは行かなかった。モスク建設費の工面のため、醸金募集は数年にわたって継続した。インド商社等を通じてだけでなく、各種行事も利用されたようである。たとえば1933年12月には、来日直後のタタール人民族主義指導者アヤズ・イスハキ（Ayaz Ishaki, 1878-1954）の歓迎を兼ねて、神戸トルコ・タタール協会附属児童教育所でモス

ク建立基金募集のための「演藝会」が催されている<sup>(28)</sup>。着工の目処がついたのは1934年初め頃らしい。この頃にはすでに、日本人ムスリムの植村阿禮<sup>アリエ</sup>に建築準備に関わる諸事務を代行させていたという<sup>(29)</sup>。

そして同（1934）年4月、ついにボチアによってモスク建立の出願がなされた。このときすでに7万円の寄附金が集められていたらしい。出願を受けて兵庫県が文部大臣に稟伺したところ、「明治三十二年七月内務省令第四一號ニ依リ許否スヘキ限ニ非ザル旨ノ御指示」があったという<sup>(30)</sup>。同省令は、その第二條に「宗教ノ用ニ供スル爲メ堂宇會堂説教所又ハ講義所ノ類ヲ設立セントスル者ハ左記事項ヲ具シ其所在地ヲ管轄スル地方長官ノ許可ヲ受クヘシ」と述べ、細則を定めたものである<sup>(31)</sup>。文相からの指示にある「許否スヘキ限ニ非ザル」という文言は（法律上宗教として認められていないイスラムは）同省令の関知するところではないということだろう。そこで県は次のように判断した。

本教ハ我國內ニ於テ未ダ行政上宗教トシテノ処遇ヲ受ケス類似宗教トシテ取扱フベキモノト認メラレ、宗教トシテノ処遇規定ナキノ故ヲ以テ之ヲ阻止スベキ何等ノ事由存セザルノミナラズ、外國人保護取締ノ見地ヨリシテ寧ロ彼等ノ宿望ヲ達成セシメ之カ指導取締ヲ爲スハ妥當ナル処置ナリト認メ審査ノ上本月〔1934年11月〕十四日附縣指令建第四二二一號ヲ以テ建築認可ヲ與ヘタルニ〔……後略〕<sup>(32)</sup>

イスラムは新宗教等と同じく、行政上「宗教」の扱いを受けない「類似宗教」と見なされた。したがって、法人格は認められなかった。このこと自体は、後に問題になるように、在日ムスリムの不満の種だった。しかし、ここではそれが彼らにとって格別不利に働いていない。「宗教」でないこと自体はモスク建立を禁じる理由にはならず、むしろ外国人である彼らを管理す

る上では、それを認めたほうがよいという理路を県側は展開した。

ただし、次の事実も指摘しておきたい。最終的に兵庫県が下した判断は時局を考へても当然だったように思われるが、これと異なった態度も官界の一部に存在したことである。昭和8年7月の在コロポ領事代理、黒木時太郎の報告「神戸市ニ回教寺院設立ノ件」には次のようなコメントが付されている。

右ハ單ニ無害ナル宗教運動ト思考セラル、モ回教ノ如キ現代文化ト調和セサル宗教ニシテ日本青年ノ間ニ宣傳セラル、弊害ト一方此ノ宗教ヲ信奉スル国民特ニ亡命客トノ交通モ盛ニナリ国家ニトリ取締上面倒ヲ惹起スル虞アル可キニ付寺院建設等布教ヲ具体化セサル内其トナク注意ヲナス必要ナキカト愚考ス<sup>(35)</sup>

1933年の時点でこうした意見具申が行われていたわけである。これが外務本省でいかに受け止められたかは定かでないが<sup>(34)</sup>、結果から言えば、何の影響も及ぼさなかったし、後の「回教政策」路線とも相容れぬものだった。ただ、政策水準における判断は別として、このようなイスラム認識も一部に存在したことは覚えておくべきだろう。

### 3. 定礎式

1934年11月14日にモスク建設が認可されると、モスク委員会は竹中工務店と建築請負契約を結んだ。鉄筋コンクリート造のモスク本体は地上三階、地下一階の構造物で、これに二階建の附属家屋（木造）がつくというものだった<sup>(35)</sup>。設計したのはチェコ出身の建築家シュヴァグル（Jan Josef Švagr, 1885-1969）の「スワガー建築事務所」とされている<sup>(36)</sup>。

同月30日にはモスクの定礎式が行われた。兵庫県知事の報告によると、当日はモスク敷地に「在神トルコタタール系旧露国人及印度人約三百四十名」が参集、午後2時半から式が挙

られたという<sup>(37)</sup>。在神ムスリム数として340名は多すぎるので、おそらくこれは他の都市から来たムスリムをも含む数字だろう。「主ナル来賓」として駐日アフガニスタン国公使、在神エジプト領事（ファウズイー）、在神英国副領事、トルコ学者の大久保幸次らが袖を連ねている。大阪・京都・名古屋のタタール人代表らの名が挙げられる一方で、東京のタタール人がこの来賓リストに掲載されていないのは、やはり彼ら（クルバンガリー派）との不和確執を物語るものだろう<sup>(38)</sup>。祝電発信者には、当時在ハルビンのイスハキの名も見える。翌12月1日の『神戸又新日報』によれば、市社会課長、県外事課ロシア係主任ほか各主任、インド人ナショナルリスト・サハーイ（国民会議派日本支部長）らも出席している<sup>(39)</sup>。ここでは補足として『神戸新聞』の記事を引いておこう。

「回々教のお寺 来春四月には立派に出来上る きのふ盛大な定礎式」

異邦の空に人種を超越し宗教を通じて固く結合された回々教徒の国際風景——かねて神戸在住の土耳其タタール人百五十名と印度人百餘名の回々教々徒の間に神戸區山本通二丁目貿易商 M・M・ボチャ氏を委員長として人種を超えて宗教的結合を圖るべく、イスラム教寺院の建設運動を起してゐたが去月廿日縣當局より建築認可があつた茲に工費七萬圓を投じ神戸區中山手通二丁目五六に古典美の異彩を放つビザンチン様式鐵筋コンクリート三階建寺院を建築することに決し、この寺院の起工に先き立つ定礎式が卅日午後三時から國際的雰圍氣に包まれつゝ盛大に行はれた

式場は清砂を敷き詰め大天幕を張つて我が日本の國旗日の丸と土耳其國旗を交叉し式場内は万國旗を飾り來賓には埃及領事マムード・ベイ・ボーヂ氏、神戸市長代理木村社會課長、東京駒澤大學大久保教授、寄附功勞者フロースデン氏、縣外事課廣畑岡本兩警部らほか大阪、京都、名古屋各地の代表者及び神

戸在住のメンバー約四百名が参集し宗教的感激の溢れるなかで先づシヤキル・トラベリー僧正の擧式についての挨拶あり、更にこれを各國語に翻譯があつてから委員長ボチヤ氏からけふの喜びを迎へるに至つた経過を報告

銀のスプンを取つて『祈禱により神に通ず』といふ意味のアラビヤ語を彫り込んだ定礎を地下に埋めその上から清砂を振り撒き、参列の信徒が讃仰の辭を繰返すうちに嚴肅な定礎を終了

各地教徒からの祝電披露、來賓祝辭邦人代表駒澤大學大久保教授に國際的交驩が盡され午後六時定礎式を終つた、同寺院の竣工は來春四月の豫定である<sup>(40)</sup>

在神ムスリムとしてタートル人150名、インド人100余名という数字が挙がっている。これに加えて若干の中東系ムスリムもいたが、ここでは——他の多くの資料でも——彼らへの言及はない<sup>(41)</sup>。前二者に比べて僅少だったため目立たなかったのだろう。いずれにせよ、在神ムスリムのほとんどが参列したものと思われる。

ボチアの演説は、その概要を外務省記録に見ることができる。彼は「本日ノ集会ハ回々教寺院ノ定礎式挙行トハ申シテ居リマスガ、<sup>(タタ)</sup>畜ニ定礎式ヲ挙行スルノミニ止マラズ實ハ日本ニ回々教ヲ基礎ヅケルニアル」との内容を述べ、それまでイスラムに関する知識が欠如していた日本でイスラムの「眞理ト善美」が理解され、イスラムが普及することを祈願したという。また、日本におけるイスラム布教事業がすでに始まっていることを述べ、特に「有賀アーマツド」(有賀阿馬土=有賀文八郎)と「植村アリー」の名を「我々ノ仲間」として挙げる<sup>(42)</sup>。東京方面すなわちクルバンガリー周辺の日本人ムスリムに対する言及はない。のみならず、そもそも在京ムスリムに対する言及自体、全くない。ボチアはまた、主たる醸金者の名を挙げ、在日ムスリムだけでなく、ランゲーンやボンベイの後援者たちにも謝意を表している。彼はアフメド・イ

ブラヒム兄弟社の神戸支店長だったが、モスク建立事業に理解を示した主人に対しても特に謝意が表明されている<sup>(43)</sup>。

英国副領事の覚書によると、在神英国領事館員は全員定礎式に招待され、丁重に遇されたらしい。また、インド人やタートル人の演説は押し並べて非政治的なものだったという。多少なりとも政治的な演説を行ったのは、唯一、大久保幸次だったと副領事は言う。イスラムは初期の勝利の後、長きにわたって「白人」による支配を受けてきたが、日露戦争、ついで欧州大戦における「白人」の自殺行為を経て、再び形勢は変わりつつある、というような内容だったらしい<sup>(44)</sup>。当時の日本ではありふれた言説と言えるだろうが、英国人には不愉快だっただろう。

日本初のモスクの定礎式が行われた事実は海外でも知られるところとなった。様々な国で報道されたのだろうが、外務省記録に収録されている記事は二つしかないようである。一つは式の2ヵ月後、1935年1月31日にトルコの『ソン・ポスタ』(*Son Posta*)紙に掲載された記事である<sup>(45)</sup>。「極東におけるトルコ文化とトルコ人の存在」(“Uzak Şarkta Türk Harsı Ve Varlığı”)と題されているように、中心的役割を担ったインド人よりもタートル人を前面に押し出して報じているところがトルコの新聞らしい。また、「数千人もの」(binlerce)会衆が参列したかのごとく述べているところも、よくある誇張とはいえ、注意すべき点かもしれない。遠く離れた中東で、「日本のイスラム」に関して誇大なイメージが一人歩きするきっかけの一つにもなり得ただろうからである。

外務省記録に収められたもう一つの海外報道は、1935年4月17日にフランスの『ル・タン』(*Le Temps*)紙に掲載された論説記事である<sup>(46)</sup>。トルコ問題に関する著書もあるモーリス・ペルノー(Maurice Pernot)が執筆している。「日本とイスラム」(“Le Japon et l'Islam”)というタイトルからもわかるとおり、神戸モスクそのものに関する記事ではない。日本とイスラム世

界の接近が欧州にもたらす影響について政治的な観点から述べたものである。神戸モスク建立は「日本とイスラム」の接近という大きな趨勢の中にある一つの、しかし象徴的な出来事として触れられている。こうした捉え方にも一定の妥当性はあるだろうが、これまで見てきたように、神戸モスク建立は在神ムスリムらによる自発的な事業であり、日本の国策とは一線を画している。それを、東京におけるクルバンガリーの活動やその周辺にいた日本人ムスリムの活動などと一緒に論じるのみで、両者の性格の違いを無視する点は、遠隔地における情報精度の低下を示しているとも言える。そもそも記事は、11月に行われた定礎式を「1934年10月の神戸における新モスク落成式 (inauguration)」と誤って伝えている<sup>(47)</sup>。とはいえ、このように多少問題のある記事もまた、極東のイスラムに関して当時の欧州人がどのような情報を持ち、それをどのように判断していたかを知るための一助にはなるだろう。

#### 4. 献堂式と落成祝賀会<sup>(48)</sup>

起工から約8ヶ月後の1935(昭和10)年7月末に神戸モスクは竣工した。7月24日にモスクの「建築使用認可」が与えられている<sup>(49)</sup>。前年12月1日付『神戸新聞』の報道では4月、同『大阪毎日新聞』(神戸版)等の報道では5月竣工の予定となっていたが、何らかの事情により工事が数ヶ月遅延したらしい。

その後、8月2日の金曜日を待って、献堂式が行われた。『モスク報告書』によると、当日はインド、ロシア、ドイツ、満洲、中国、トルキスタン、ジャワ、日本、エジプト、アフガニスタン出身のムスリム男女が参集した。当時のモスク委員長のインド人、マスター (P. M. Master) がモスク建立の経緯を語った後、フェローズッディンがモスクの開扉を依頼された。彼はモスク正面扉へと歩を進め、短いスピーチを行った上で、まず、向後半年間のモスク維持費を自ら負担する旨発表した。その後、彼はこ

の日のために特別に用意された銀の鍵でモスクの扉を開け、「日出づる國」初の「イスラム寺院の開院」を宣言した。これに続いてムスリム会衆が「神は偉大なり」と唱えながらモスクに入り、フェローズッディンによってミナレット上からアザーン(礼拝の呼びかけ)が行われた後、モスクで初めての金曜礼拝が行われた<sup>(50)</sup>。これ以後、毎週金曜日の集団礼拝や子弟教育を初めとして、在神ムスリムの様々な活動がモスクや附属学校を中心に行われることになる。

献堂式は主としてムスリムのあいだで行われたが、これとは別に日本人その他の非ムスリムをも招いた盛大な落成祝賀会も催された。この祝賀会は、様々な準備の遅れもあり、献堂式から2ヶ月以上経った10月11日(金曜日)に開催された。『モスク報告書』(4, 8頁)には、献堂式が盛夏にあたったため、気候がよくなるのを待ったとある<sup>(51)</sup>。この時期、フェローズッディンはインドへ帰っており、ポチアも不在であったため、代わって全インド・ムスリム連盟 (All-India Muslim League) の元議長ミヤン・アブドゥル・アズィズ (Mian Abdul Aziz, 1872-?) が祝賀会の座長を務めることになった<sup>(52)</sup>。

A. アズィズは祝賀会の2ヶ月ほど前からすでに来日しており、9月2日には彼を囲んでの茶会が旧居留地にあったオリエンタル・ホテルで開催されている。この会には兵庫県知事代理、神戸市長代理ほか、内外の知名士が数多く出席した。翌日の『神戸又新日報』は約300名、『神戸新聞』は約200名の参会者があったと報道している。神戸発行の英字紙『ジャパン・クロニクル・ウィークリー』紙の報道にはインド人コミュニティのほとんど、インド人以外のムスリム、彼らの友人らが参加したとある。会は略式のもので、スピーチ等は行われなかったという<sup>(53)</sup>。

さて、各種新聞報道によれば、10月11日の祝賀会当日、神戸の天気は小雨まじりの薄曇りだったようである。まず、祝賀会に先立って午



後12時半から、モスクでの礼拝が行われた。翌12日付『大阪毎日新聞』（神戸版、5面）はその様子を次のように伝えている。

屋上高い弦月教章の下、トルコ帽の男子教徒や赤、青、白色とりどりのヴェール姿麗しい婦人教徒の唱へるアラビヤ語の祈禱がステンドグラス越しに小雨の窓外に洩れて、神戸回教會の晴れの献堂祝賀式は十一日午後零時半の祈禱會によつて開幕した、この日新装の教會建物のところどころに日の丸と弦月旗を交叉したばかり、至つて簡素な装飾のうちに力強い國際民族の握手をシンボライズする眞黒な顔に白いターバンを巻きつけた印度人や、花やかに装つたトルコタール婦人教徒など喜びの在神教徒三百余名が續々と集まつて、回教會僧正イマム・シヤムグニ師の導師で嚴肅な祈禱會に入りはるかなる聖地メツカに向つて一同立つたり額いたり奇異な動作を續けながら聲高らかに「アラー・オー・アクバル」（神は威大なるかな）と神を讃へ、この間本社トーキー班も盛んに活躍してこの盛儀をフィルムに収め同一時ごろ祈禱會を終了した〔後略〕

この後、モスクの近くにあったトーア・ホテル（1950年焼失）に場所を移し、午後4時半頃から祝賀會が催された。正確な数は不明だが、500-600名という大人数が出席したらしい<sup>(54)</sup>。賓客の中には勝田神戸市長、在神英国領事やエジプト領事など各国領事<sup>(55)</sup>、外国人商工会議所代表、サハイイなど地元の知名士や報道関係者が含まれていた。ムスリムとしては、在神者および日本（内地）各地の代表らに加えて、朝鮮（大邱・新義州）、満洲（ハルビン）、中国などからの参加者があった。当時満洲にいたイスハキは、病気のため出席できなかったが、祝辞が代理朗読されたという<sup>(56)</sup>。イスハキのイデル・ウラル・トルコ・タタル文化協会と立場を異にしたクルバンガリーやアブデュルレシト・イ

ブラヒムは出席していない<sup>(57)</sup>。なお、数は少ないが、日本人ムスリムも出席していた。有賀文八郎や、当時「満洲伊斯蘭協會總裁」の川村狂堂（乙磨）などが出席している<sup>(58)</sup>。また『神戸又新日報』（昭和10年10月12日付、5面）によると、当日の午後12時50分——すなわち、モスクで礼拝が行われていた頃——から、「外務省囑託」という肩書で佐久間貞次郎（1886-1979）が神戸貿易會館の「楼上大集会」で「回教及回教民族と日本の進路」と題する講演会を行っている<sup>(59)</sup>。日本人がイスラム文化を知る必要性を強調し、そうすることによって「目下行詰り状態の蘭領印度市場その他埃及市場等々の対通商貿易に関して此の回教文化に依つて啓発さるべき方策は幾らも残されてゐる現状にあることを一般民衆は勿論貿易業者は特に関心を持つべき」との内容を述べたという。彼が「回教寺院献堂式に列席」したことも『神戸新聞』（昭和10年10月12日付、3面）に報道されている<sup>(60)</sup>。だが、招待客だったかどうかは不明であるし、講演会の方は祝賀會とは無関係で、むしろ機會を利用しただけではないかと思われる。

祝賀會では、タタル人の少年によるコーランの朗詠が行われた後、P. M. マスターが挨拶を述べ、続いてA. アズィズ、イマームのシヤムグニ（M. Shamguni, 1873/4-1939）らが演説を行った。各地から届いた祝電も披露された。実際に出席したか、あるいは祝電を寄せるにとどまったか、個々のケースには判断しがたいものもあるが、少なくとも祝辞が披露された者として、上記三者に加えて、イスハキ、大久保幸次、バルラス（東京外国語学校ヒンドゥスターニー語外国人教師）、タルズィー（在京アフガニスタン公使）、有賀文八郎、川村狂堂、北平（北京）のムスリム代表らがいる<sup>(61)</sup>。祝賀會に出席した英国領事は、日本人官僚が不在であることを特記している<sup>(62)</sup>。

A. アズィズが行った演説は、その著書『日出づる国の三日月』に収録されており、また外務省記録や『ジャパン・クロニクル』の報道な

ども概要が記されている。イスラムそのものに関する解説が多いが、日本におけるイスラムについても部分的に語っている。要約すると、神戸モスクの建立は日本の宗教的寛容性を象徴するものであること、また東京にもモスクが建設されるべきことを主張し、ゆくゆくは数多くのモスクが建立されるくらい日本にイスラムが広まることを祈願している。「神戸」すなわち「神の門戸」という地名に対する象徴的な解釈も披露され、さらには、「三日月の地」(the Land of the Crescent) すなわち「月出づる国」(the Land of the Rising Moon) に預言者ムハンマドが建てた最初のモスクがメディナのKoba (Qubā) モスクであって、「日出づる国」最初のモスクがKobe モスクであるというその音的類似のうちに、ある種の神意を感じ取る内容も含まれる。他方、神戸在住のシャムグニ師は日本側に配慮し、特に「日本国皇帝」や政府官庁、神戸市役所、警察官憲の名を挙げて謝意を表した<sup>63)</sup>。

『モスク落慶記念冊子』に寄稿した人物は12人いる。A.アズィズらインド人6人、イスハキラタートル人3人、エジプト人1人(ファウズィー)、アフガニスタン人1人(タルズィー)、日本人1人(大久保幸次)という内訳で、ここにもインド系の主導性が表れている。在日ムスリムに直接関係のない寄稿者は、インド系の在外ムスリム3人である。最初に置かれたMaulvi Aftabuddin Ahmedは英国で活動していたWoking Muslim Mission所属モスクのイマーム、すなわちアフマディーヤのラホール派に属する人物である<sup>64)</sup>。詳細は不明だが、在神ムスリムの有力者の中に同派の者が含まれていた可能性もある。『モスク報告書』の巻頭には勝田銀次郎神戸市長(在任1933-41)の短いメッセージが掲載されている。これは社交辞令的な文章で、モスクが「神戸市の如き国際都市にとつて誠に相應しいものであつて已に多くの名所を有する本市に更に一つの名所を加へるもの」であり、また「神戸をして日本のメッカた

らしめるもの」であると述べ、これが日本とイスラム諸国の友好関係強化につながることを願っている。

## 5. A.アズィズ

新聞記事など多くの資料で、A.アズィズはモスク落成祝賀会を執り行うために来日したとされる。彼自身も『日出づる国の三日月』の序文に「1935年、著者はイスラム世界を代表して神戸モスク落成式を執り行う(perform)ため訪日するよう要請された」と述べる。ところが『モスク報告書』(4, 8頁)には、フェローズディンやボチアが留守だったので、「當時たまたま来朝中であつた(happened to be in Japan at that time)」彼に座長を頼んだ旨が記されており、来日は当初、落成祝賀会と無関係だったように読める。また、彼の著書(第二部扉前)に挿入されたモスク接待委員会名誉幹事からの座長依頼状の写真も、それを裏付けているように見える。依頼状は落成祝賀会(当時は9月27日に予定)の座長役をA.アズィズに要請することが8月23日夜に決定されたことを伝えるもので、すでにオリエンタル・ホテルに滞在中の彼に向けて翌日付で送られている。つまり、在神ムスリム側から発信されたものを読むかぎり、A.アズィズが最初から落成祝賀会を取り仕切るために来日したようには見えないのである。

ここで注目されるのが、先の序文で彼が明かすもう一つの来日目的である——「また日本のイスラムに関する不可解な叙述を含む記事がエジプトやインドの新聞に出ていたので、彼の地でムスリムが置かれている状況について報告するとともに、イスラムに関する講演を行ってイスラムの友好親善の任に当たるよう要請された」。その成果が『日出づる国の三日月』という書物に他ならない。「日本のイスラムに関する不可解な叙述を含む記事」とあるが、来日経験のない者が日本人や天皇によるイスラム受容など噂に基づく馬鹿げた記事を書いていると痛

罵している箇所があるので(19-20頁)、その類の事柄について真相を確かめようとしたのだろう<sup>(65)</sup>。彼の当初の目的はむしろ、日本のイスラム事情調査であって、落成祝賀会の件は(何らかの理由で)後になって来日目的に付け加えられたのではないかという疑念も残る。

この点については、彼と会談した在神英国領事の報告も興味深い<sup>(66)</sup>。彼の、言わば裏の顔が見られるからである。『日出づる国の三日月』にも、祝賀会等で公言できなかったこと——在日ムスリム・コミュニティの分裂や一部のインド系ムスリムの非協力的な態度、またイスラムを宗教として公認しない日本政府に対する苦言——は披露されている。しかし英国領事の報告においてA.アズイズは、それとも比較できぬほどあけすけな親英・反日的人物として現われる。

領事はまず、彼の詳しい経歴は不明としながらも、その非常に親英的な態度について記す<sup>(67)</sup>。そして、彼の見解(だと判断したこと)について、概略以下のように述べる。(1)モスク建立自体は当然で正当な要求だが、その背後には、インドの(政府に対する)ムスリム不満分子の手が動いている。彼らは日本人を改宗させ、インド・ナショナリズムの大義や商業的利益に対する日本人の関心を喚起しようとしている。(2)現在、好ましくない日本の宣伝活動がインドで行われている。多くの日本人が既にムスリムに改宗しているという印象がインドその他のムスリムのあいだに創り出されており、「神戸の新モスク建立もそうした事実の表れとして受け止められている」。さらに無知な人々のあいだでは、天皇もムスリムになったという話すら信じられている。ところが実のところ、神戸どころか日本中を探しても、真の日本人ムスリムなどいない。(3)在神ヒンドゥー教徒たちの多くは反英感情(disloyal sentiments 忠誠心に欠けた感情)を持っているとされることを知っているが、ムスリムも大してかわらない(これについて、領事は自分たちの通常の考え

と異なっている旨補足)。(4)主要な在神インド商人は日本側から間接的な支援、助成金を受けており、その見返りに、日本やインドでの反英宣伝活動に協力することが期待されている。インドでは現在、日本が政治的な領域だけでなく宗教的な領域でもムスリムに同情的であるという考えが広まりつつある。これには潜在的に相当な危険性があるので、時機を失しないうちに対抗措置を採るべきである。(5)自分にはインドのムスリム社会における権威と、今回直に得られた日本の実状に関する情報があり、インド当局からしかるべき援助を受けることさえできれば、必要な対抗宣伝活動を十分にうまくやり遂げることができる(と考えていると領事は受け取った)。(6)(日本の宣伝活動はどのような手段によるのかという質問に対して)最も活動的なものの一つはエジプトの新聞である。東京には、日本に関する記事をエジプト紙に寄稿している人物がいる(領事は「クルバンガリーか?」と付す)。この新聞はインドでかなり読まれており、これによって、ムスリムに対する日本人の同情について誤った、有害な説が流布している。

報告には同領事による「覚書(Minute)」も添付されている。それによると、上京する領事に対してA.アズイズは、英国大使に見せるようメモを手渡した。落成祝賀会の演説用にとKobe Muslim League Committee(モスク委員会?)から提供された参考資料だった。「覚書」の後ろに収められた23頁に及ぶ文書「日本へ——イスラムからの伝言」(To Japan: The Message of Islam)がこのメモだと思われる。日本とイスラムの関係を強化しようとする内容で、それが日本にとって計り知れない政治的・経済的利益をもたらすと説く。執筆者は不明だが、A.アズイズはFutehallyではないかと考えていたという。Futehallyは在神インド人コミュニティの顔役の一人で、同じく在神のインド国民会議派サハーイの親友だったらしい。A.アズイズは言わば内部資料を英国側に流したわけで、

ある意味で在神ムスリムへの背信行為とも言いうる行動である。英国領事はこうした人物について、日本の宣伝活動の危険性をやや誇張するきらいがあるとしながらも<sup>(68)</sup>、インドにおける英国の大義に対する熱意と忠誠心は疑いないようだとの評価を下している。

この会見が行われたのはモスク落成祝賀会後のことで、A.アズイズは領事に対しても、「落成祝賀会の座長を務めてはとの提案(suggestion)を受けて来日した」と述べている。しかし同時に「自分を派遣した(sent)ムスリムたちへの報告をあまり遅らせることはできない」とも述べたという。推測の域を出るものではないが——先の序文にも示唆されているように——彼は在神ムスリムに招かれたというよりは、インドのムスリムに派遣されたと言う方が妥当なのかもしれない。背後にいたのが誰かは不明である。英国外交官に接触した真の意図もわからない。ただ、A.アズイズと在神ムスリムの関係は元来稀薄であり、結局のところ彼はよそ者の脇役でしかなかったとは言える。しかし彼の見解や振る舞いに対する価値判断はともかく、ムスリムとしてのアイデンティティを強く保ちつつ、親英的立場から日本とイスラム世界の関係を観察していた彼は、当時の親日的ムスリムの見解を相対化する意味でも興味深い。

## 6. モスク運営

完成したモスクはその後の維持費が必要になってくるが、当然ながら、その算段も当初からなされていた。

モスクの財政状態は幸ひにして健全、収支相償つてをります。壹萬參千圓を投じて家屋を購入、毎月約百圓の純益を生み出して居ります。ほかに現金貳萬七千圓あり、これでさらに家屋を購入、毎月貳百圓の収入をあげるならばモスクの維持費は充分であると考へて居ります。なほその上 A. A. カリム兄弟商會か

ら横濱において納税免除の土地八十一坪の寄附を受けました(『モスク報告書』5頁)<sup>(69)</sup>。

すなわち、ワクフ(イスラムの財産寄進制度)によるモスクの維持であり、ここでもアブドゥル・カリム兄弟社の貢献があった。

また『モスク報告書』にはモスクの運営にあたる「理事会(Board of Directors)」と「管財委員会(Board of Trustees)」全員の氏名と写真が掲載されている。理事会は10人中6人がインド人で、4人がタタール人だが、理事長はじめ要職にはインド人が就いている。管財委員会は9人中6人がインド人、3人がタタール人である(4人が理事会員を兼任)。インド人中2人がアフメド・アブドゥル・カリム兄弟社に、2人がアフメド・イブラヒム兄弟社に属していた。理事長で管財委員でもあるマスターは醸金リストに見える Thanawalla & Co. の社員であり、管財委員の筆頭に挙がるフェローズブディンと言うまでもなく主たる醸金者である。つまり、タタール人に配慮しながらも、インド人が役員<sup>(70)</sup>の3分の2を占め、資金集めに重要な役割を果たした人々が要職に就いたのである。

運営組織については、外務省記録にも関連文書が残っている。「財團法人神戸ムスリム・モスク維持財團寄附行爲」と題する文書で、「本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件/回教関係(大日本回教協會ヲ含ム)」第二巻に収録されている<sup>(70)</sup>。直前に昭和13年5月26日付、文部次官発、外務次官宛「在神戸回教寺院ニ關スル件」がある。翌年の「宗教団体法」公布を控え、神戸モスクがイスラム公認に向けた運動を活発に行っていた頃なので、その関連で引き合いに出されたものと思われる。結局——イスラムは行政上「類似宗教」でしかなかったため——財団設立は認められなかったが、この寄附行爲(定款)案によって神戸モスク運営組織のあらましがわかる。まず、社員資格は「モスリム信徒ニシテ引續キ三ヶ月以上日本國內ニ居住シタル者」で、書面による加入申込の上、理事会で承認さ

れる必要があるとされた（第八條）。本案作成時の理事は10人で、7人がインド人、残りはタタール人である（第十條）。ほかに監事として3人の名が記されているが、2人がインド人、1人がタタール人である<sup>(71)</sup>。

組織の主体がスンナ派で、特に法学派としてはハナフィー派であることが明記されているのも興味深い。たとえば、理事や監事は「スンニ・ハナフィ・モスリム」より選任されることになっていた（第十一條）。定款自体の変更も、票決権を有するハナフィー派信徒の出席者が総会の3分の2以上を占め、かつ彼ら（ハナフィー派信徒の出席者）の3分の2以上が支持したときのみ可能とされた（第三十七條）<sup>(72)</sup>。主たる構成員のタタール人やインド人の多くはハナフィー派であるから当然とも言えるが、逆に言えば、インド系等にときおり見られるスンナ・ハナフィー派以外の信徒も所属することはできたということである<sup>(73)</sup>。

また、インド人の主導的役割も明記されている。第十二條に「本財團法人ノ理事及び監事中少クトモ三分ノ二ハ印度系「スンニ・ハナフィ・モスリム」信徒タルコトヲ要ス」とある。実際、理事会等の構成はそうになっている。醸出金その他のことを考えれば、当然だろう。また、会計役もインド系のハナフィー派信徒であることが定められており（第十六條）、同役が辞任した際は、「神戸所在印度スンニ・ハナフィ・ムスリム信徒ノ法人又ハ商店中ヨリ之ヲ選任ス」べしとある（第二十一條）。

在神ムスリムらはモスク建立を控えた1934（昭和9）年に「法人設定許可願」を兵庫県に提出していたが、「實際上集會等ヲ規定スル諸規則ニ抵触セサル限り禮拜所參拜ニハ何等異存ナキモ明治十七年（一八八四年）内務省令ニ據リ基督教、佛教及神教以外ノ宗教ノ場合ニ於ケル公開禮拜ハ許可セラレサルノ理由ヲ以テ同委員の出願ハ受理スル能ハサル旨通達」されたという<sup>(74)</sup>。時局的要請からしても、在日ムスリムらを当局が邪険に扱うことはなかっただろう。

しかし、ムスリムたちは、たとえ形式的であってもイスラムが「類似宗教」として扱われることに大きな不満を抱いただろうし、実際的な面では、税制上の不平等を問題視した。『モスク報告書』（5頁）にもこの問題は取り上げられている。

我々は眼前に一つの重大問題を控へて居ります。イスラム教は日本では公認宗教でないからキリスト教その他公認宗教同様の特典を受けることが出来ません。我々は日本政府がこの宗教をよく理解するやう極力奔走する覺悟であります。然しこれはよく短時日に成し得られることではない、全日本のイスラム教徒を代表し、あくまでたゆまず力を合せあらゆる難關を乗越えて目的貫徹へ邁進する考へです。

A. アズィズもこの点を問題視し、自ら文部省関係の機関に出向いたが、成果は得られなかったと述べている<sup>(75)</sup>。結局、この問題はその後も尾を引き続け、「回教公認問題」として、1939年の宗教団体法公布前後まで日本の様々なイスラム関係者らを巻き込んでいくことになるのである<sup>(76)</sup>。

## 結論

神戸モスク建立の過程は概略、以上のようにあった。利用しえた資史料も充分とは言えず、重要な事実の洩れや、筆者の誤解があるかもしれない。だがともかく、モスク建立事業の基本的な流れをできるだけ整理するように努めた。

この計画を主導したのは明らかにインド系ムスリムである。資金面での多大な貢献を反映して、重要な役職はすべて彼らによって占められた。海外からの醸出金もほとんどは南・東南アジアのインド系コミュニティから出されたものである。しかしモスク委員会や理事会等はインド人だけで構成されたわけではない。常に彼らの傍らにいたのがタタール人だった。最も人数が

多く、また宗教者を出していた点が大きかったのだろう。モスク委員会や理事会等は、初期に名誉会長的な役割を務めたエジプト人外交官らを除いて、インド人とタタール人のみで構成された<sup>(77)</sup>。一時期モスク委員長を務めたエジプト領事ファウズイーは寄附を行い、『モスク落慶記念冊子』にも寄稿しているが、大きな役割を果たしたとまでは言えない。在京アフガニスタン公使タルズイーも同様である。地方ということもあったのだろうが、トルコ大使館やペルシア（イラン）公使館など他のイスラム国の公館はモスク建立事業そのものに関与していない。日本政府も事業に容喙することは特になかった。妨害も積極的な援助もしていない。概して、「中央」や「公」の影はほとんど見られないのである。確かに、法人化問題で日本政府はムスリム側の要求を拒否した。しかし、これは本事業への対応というレベルを超えた宗教法制上の問題であり、国際的に見ていかに異様であろうと、すぐに解決できるものではなかった。既存の法制の枠内では、通常の対応がなされたと言えるだろう。また日本人としては、植村らムスリムが協力したが、彼らも国策からは遠いところにいた。果たした役割も微々たるもので、彼らが要職に就くことはなかった。

このように国内的には神戸モスクと政治が過度に結び付く状況は、少なくとも当時はなかった。新聞報道などを見ても、そうした色はまだ出ていない。しかし、フランス紙に見られたように、海外では日本とイスラム世界の接近の象徴として政治的意味が大きくなっていったように思われる。A. アズィズの言動もそれを示している。後の戦中のことになるが、米国 CIA の前身である OSS (Office of Strategic Services) は日本の対イスラム政策を分析した資料の中で、神戸モスク建立事業を日本の国策的文脈の中に位置づけ、A. アズィズさえも親日的ムスリムであるかのように誤読している<sup>(78)</sup>。また1945年4月に OSS は神戸モスクをあしらった絵葉書を改竄し、そこにイスラムの信仰告白を

もじった「アッラー以外に神はなし、ヒロヒトは神のカリフなり」という冒険的な文句をアラビア文字で書き入れた葉書を作成した。日本に対する印象を悪化させるためである。東南アジアの一角で配布される予定だったこの絵葉書が実際に作戦に投入されたかどうかは不明らしいが、戦時になれば、こうした象徴が敵によっても情報戦に利用されうることをよく示している<sup>(79)</sup>。

もっとも、これらの事柄はモスク建立後、日本の敗戦までの社会政治状況・戦況に照らして考えるべき部分を含んでいる。こうした本稿の射程を超える部分については、在神ムスリムによる反英運動の展開やイスラム公認問題の最終局面、日本政府によるイスラム関係諸団体の統制、戦時下におけるモスク運営などと併せて、稿を改めて論じることにはしたい。

#### <注>

- (1) 神戸モスクの正式名称は「神戸ムスリムモスク」(英語名: The Kobe Muslim Mosque, アラビア語名: Masjid Kōbe) であるが、本稿では「神戸モスク」と称する。
- (2) 店田廣文・岡井宏文『日本のモスク調査1——イスラーム礼拝施設の調査記録』早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室, 2008年; 同2, 2009年; 岡井宏文「滞日ムスリムによる宗教的基盤の獲得と変容——モスク設立活動を中心に」『人間科学研究』(早稲田大学人間科学学術院) 22-1, 2009年, 15-29頁ほか。
- (3) 名古屋モスクは1931(昭和6)年にできたと言われることがある。これは誤りで、実際は1937年に落成式が行われている。したがって、1935年完成の神戸モスクが最初のモスクということになる。これらに続いて1938年に東京モスクができた。名古屋モスクは戦災で焼失、東京モスクは老朽化のため1986年に取り壊された。現存するのは神戸モスクのみである。
- (4) 森本武夫「東京モスクの沿革」『アッサラーム』20(1980), 76-80頁; 坂本勉「東京モスク沿革誌」『アジア遊学』30(2001), 121-128頁; 中田考

- 「代々木モスク」大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』岩波書店，2002年；松長昭『在日タートル人——歴史に翻弄されたイスラーム教徒たち』東洋書店，2009年など。
- (5) 名古屋モスクには，一部「日本人の篤志家」からの援助もあったという（後述の名古屋モスク落慶記念冊子，5頁）。
- (6) 当時の「英領インド」には，今日のインド，パキスタン，バングラデシュ，スリランカ，ミャンマーなどが含まれていたが，以下，単に「インド」と記す。
- (7) 『日本・イスラーム関係のデータベース構築——戦前期回教研究から中東イスラーム地域研究への展開』（平成17年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究（A）研究成果報告書，研究代表者：臼杵陽 [日本女子大学文学部]），2008年，21-62頁。
- (8) 外務省記録は，その一部を，国立公文書館のインターネット上のデジタル・アーカイブ「アジア歴史資料センター」のサイトからオンラインで閲覧できる。本稿では基本的にこれから引用し，レファレンス番号を付すが，まだデジタル・アーカイブ化されていないものは「未デジタル化」としてそれを示した。引用に際しては，できる限り原文の表記を再現することに努めたものの，技術的理由によりそれが不可能な場合もあり，不自然・不統一な面も出ることを断っておきたい。なお，引用文中の亀甲括弧内は引用者による補足である。
- (9) 資料について付言すると，筆者の言語能力の限界により，タートル語文献などは利用していない。それを補う意味で，タートル語の史料をふんだんに使った Larisa Usmanova の貴重な研究，*The Türk-Tatar Diaspora in Northeast Asia: Transformation of Consciousness: A Historical and Sociological Account Between 1898 and the 1950s*, Tokyo: Rakudasha, 2007も参照した。ただし，少なくとも神戸モスク建立に関する部分（pp. 83-85）には単純な間違いや混乱も見受けられるようである。
- (10) アブデュルレシト・イブラヒム『ジャボンヤ——イスラーム系ロシア人の見た明治日本』小松香織・小松久男訳，第三書館，1991年，253-367頁；小松久男『イブラヒム，日本への旅——ロシア・オスマン帝国・日本』刀水書房，2008年，80-82頁。
- (11) 大原とイブラヒムの関係については坂本勉『イスラーム巡礼』，岩波新書，2000年，178-180頁；同「山岡光太郎のメッカ巡礼とアブデュルレシト・イブラヒム」池井優・坂本勉『近代日本とトルコ世界』勁草書房，1999年，157-217頁（181-185頁）。
- (12) 犬養毅（1855-1932）や頭山満（1855-1944）らも関係していた。
- (13) 『ジャボンヤ』367頁の訳者注。木堂先生伝記刊行会・鷲尾義直編『犬養木堂伝』（上・中・下），原書房，1968年（復刻原本は東洋経済新報社，1938-9年）；中巻，803頁（当該箇所は足羽清美「木堂先生と同教徒関係」『木堂雑誌』昭和12年1月[筆者未見]の再録）。イブラヒムは1910年，山岡光太郎（1880-1959）を連れてメッカ巡礼を行った後，彼とともにイスタンブルを訪れ，オスマン帝国のスルタン=カリフから日本におけるモスク建設許可を得ていたという（坂本『イスラーム巡礼』182，193頁；同「山岡光太郎の……」182-183，196頁）。
- (14) 上掲『犬養木堂伝』中巻，808頁（足羽の証言）。
- (15) トルコ大使館もタートル人たちに礼拝の場を提供していたようである（内務省警保局『外事警察概況』[復刻版：不二出版，1987年]昭和11年版，134-137頁）。
- (16) 昭和5年12月15日付『讀賣新聞』（7面）には「わが國最初の回教寺院」と題された記事が掲載されており，建築中の建物の写真に加えて，ドームやミナレットを持ったモスク設計図（完成予想図）が付されている。工事の規模縮小はこの時点でもまだ決定していなかったことを窺わせる。代々木の東京モスクに先立つ東京でのモスク建立計画については，小村不二男『日本イスラーム史』日本イスラーム友好連盟，1988年，

- 295-297頁にも記述がある。
- (17) 落成式については、昭和12年1月23日付『名古屋新聞』11面、『新愛知』（名古屋市内版）6面、『大阪朝日新聞』（名古屋市内版）7面等の新聞報道も参照。Usmanova, *The Türk-Tatar Diaspora*, pp. 105-107にも記述がある。
- (18) 外務省記録、兵庫県知事高橋守雄発、内務・外務大臣ほか宛、昭和5年1月28日付「外国人関係諸団体調ニ關スル件」所収の「外國關係諸団体調（昭和四年末現在）」、K.3.7.0.14「在本邦諸団体調査關係雜件」第一卷（未デジタル化）。日本語史料では委員会の名称は様々に記述され、『モスク落慶記念冊子』では *the Muslim Mosque Committee* という名称が使われているが、本稿では「モスク委員会」と記す。
- (19) 兵庫県知事岡正雄発、内務・外務大臣ほか宛、昭和6年2月24日付「「タートル」協會總會及寺院建設計画ニ關スル件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B04012555900（第2-4画像）、外國神廟及寺院關係雜件、6。在神戸タートル協會寺院關係（I-2-2）（外務省外交史料館）
- (20) 兵庫県知事岡正雄発、内務・外務大臣ほか宛、昭和6年2月27日付「マホメット教寺院建設委員会開催ニ關スル件」JACAR: B04012555900（第5-6画像）。
- (21) 外務省記録、兵庫県知事岡正雄発、内務・外務大臣ほか宛、昭和6年3月7日付「外国人關係諸団体調査表（年表）ニ關スル件」に付された「外國人關係諸団体調」、K.3.7.0.14「在本邦諸団体調査關係雜件」第一卷（未デジタル化）。
- (22) 前掲注20の「マホメット教寺院建設委員会開催ニ關スル件」。
- (23) 兵庫県知事岡正雄発、内務大臣・外務大臣ほか宛、昭和6年5月4日付「回々教「クルバン、ガイド」祭其他ニ關スル件」JACAR: B04012533000（第9画像）、本邦ニ於ケル宗教及布教關係雜件／回教關係（大日本回教協會ヲ含ム）第一卷（I-2-1）。
- (24) 少額とはいえ、インド系ムスリムの下位グループが Kobe Memon Jamaat 名義で醸金しているのも興味深い。
- (25) デビスは旧稿で紹介した在神ビジネスマン、故フアード・デビス氏のおじの一人。リスト中の Koleilat もおそらくレバノン系と思われる。また Tayboob Khotanji & Sons という会社名が見えるが、これが Tayeb Khonji & Sons の誤記であるなら、在神の中東（湾岸）系商社である。
- (26) 外務省記録、内務省警保局「秘 昭和九年十月廳府縣別外國人又ハ外國人關係團體表」、K.3.7.0.14「在本邦諸団体調査關係雜件」第一卷（未デジタル化）；兵庫県知事白根竹介発、内務・外務大臣ほか宛、昭和9年3月29日付「在神回教徒團ノ寺院建立計画ニ關スル件」JACAR: B04012555900（第9-12画像）。
- (27) 中山手通2丁目57になっている文書もある。これはモスクの建物の番地（現住所表示は中央区中山手通2丁目25-14）だが、土地には別の地番が振られていたようである。面積が異なっているものもあるが、それは誤りと思われる。「財團法人神戸ムスリム・モスク維持財團寄附行為」JACAR: B04012533500（第61画像から）、本邦ニ於ケル宗教及布教關係雜件／回教關係（大日本回教協會ヲ含ム）第二卷を参照。
- (28) 前掲注26の「在神回教徒團ノ寺院建立計画ニ關スル件」。
- (29) 同上。植村阿禮について詳細は不明だが、本名を植村龍世といたらしい。『大阪毎日新聞』（神戸版）の昭和10年10月5日（5面）、同13年6月18日（5面）および同10月27日（13面）に短い紹介がある。
- (30) 兵庫県知事白根竹介発、内務・外務大臣ほか宛、昭和9年11月27日付「在神回教徒團ノ寺院建設ニ關スル件」JACAR: B04012533000（第82-84画像）。
- (31) 内閣官報局編『明治年間 法令全書』（復刻版）第32卷-6、原書房、1982年、541-543頁。
- (32) 前掲注30の「在神回教徒團ノ寺院建設ニ關スル件」。
- (33) 昭和8年7月28日付「神戸市ニ回教寺院設立ノ件」JACAR: B04012555900（第7-8画像）。



- (34) 外務省記録では、上記引用部分の上部余白に疑問符「？」が書き込まれている。本省の閲覧者によるものだとすると、本省でも黒木の認識は疑問視されていたのかもしれない。
- (35) 前掲注30の「在神回教徒團ノ寺院建設ニ関スル件」。
- (36) 筆者自身は、一次史料で設計者の名をまだ確認できていないが、日本建築学会編『日本近代建築総覧—各地に遺る明治大正昭和の建物』技報堂出版、1980年、329頁を参照。
- (37) 白根竹介発、内務・外務大臣ほか宛、昭和9年12月3日付「神戸モスリム回教寺院定礎式挙行ニ関スル件」JACAR: B04012533000 (第85-90画像)。
- (38) ただし、在京のイスハキ派の参加については不明。
- (39) 昭和9年12月1日付『神戸又新日報』(7面)「港神戸の國際色に新しい一筆—きのふ回教寺院の定礎式」。
- (40) 『神戸新聞』昭和9年12月1日(6面)。『モスク報告書』によると、礎石を置いたのはM. A. K. ボチアである(4, 8頁)。
- (41) 定礎式に出席した英国副領事の覚書を見ると、シリア人の演説者もいたことがわかる。R. Clive (Tokyo), 6th Dec: 1934, "Establishment of Muslim Mosque at Kobe," F42/42/23, FO 371/19349.
- (42) 有賀については、大澤広嗣「アハマッド有賀文八郎」井上順孝編『近代日本の宗教家101』新書館、2007年、18-19頁；四戸潤弥「アフマド有賀文八郎(阿馬土)—日本におけるイスラーム法学の先駆者としての位置づけ」『宗教研究』78(2), 2004年、517-539頁；クリストファー・W・A・スピルマン「河野広中関係文書に見られる上海時代の北一輝の行動—有賀文八郎からの書簡と電報を中心に」『九州産業大学国際文化学部紀要』31(2005), 1-8頁など。
- (43) 前掲注37の「神戸モスリム回教寺院定礎式挙行ニ関スル件」。
- (44) 前掲注41のR. Clive (Tokyo), 6th Dec: 1934, "Establishment of Muslim Mosque at Kobe."
- (45) 在土臨時代理大使黒澤二郎発、外務大臣宛、昭和10年2月4日付「神戸ニ於ケル回教寺院建設ニ關スル新聞記事通報ノ件」JACAR: B04012533000 (第93-94画像)。
- (46) 在仏特命全權大使佐藤尚武発、外務大臣宛、昭和10年4月24日付「[日本及イブラム]ト題スル記事送付ノ件」JACAR: B04012533100 (第54-55画像)、本邦ニ於ケル宗教及布教関係雜件/回教関係(大日本回教協會ヲ含ム)第一巻。
- (47) しかも、記事を本省に送った在仏大使の報告にあるように、記事中には「虚偽又ハ誇張セル事實」が多い。たとえば日本がアラブ諸国から1500人もの留学生を受け入れるという、当時中東で広まった流言を、事実であるかのように紹介している。
- (48) 様々な資史料では、モスクのオープニングや落成祝賀会に「開堂式」や「献堂式」などの言葉が使われている。本来、前者は仏教用語、後者はキリスト教用語として特殊な意味を持ち、モスクに転用するには不適當な部分がある。また、「開院式」という言葉が使われている例もある。しかし、本稿ではとりあえず『モスク報告書』の日本語部分の表記にしたがって、8月2日の式を「献堂式」とした。また、10月11日に行われた祝賀会(これも開堂式や竣工式などと呼ばれることがある)は「落成祝賀会」とした。
- (49) 兵庫県知事湯沢三千男発、内務・外務大臣ほか宛、昭和10年7月30日付「神戸回々教寺院竣工ニ関スル件」JACAR: B04012555900 (第13画像)。
- (50) 『モスク報告書』4-5(邦文)、8-9頁(英文)。日本語では献堂式が9月2日となっているが、同日は金曜日ではなく、英文の記述が正しい。
- (51) オスマノヴァは『ミッリ・バイラク』の記事に基づいて、8月は「お盆」のため招待者全員の出席が不可能だったと述べている(Usmanova, *The Türk-Tatar Diaspora*, p. 85)。昭和10年9月27日付『中外日報』(3面)によると、「記念アルバム」(『モスク落成記念冊子』)の作成準備そ

- の他に手遅れがあったことも予定の再延期につながったという（イスラム関連の記事が『中外日報』に多数掲載されていることは、文化庁文化部長宗務課専門職の大澤広嗣氏に御教示いただいた）。
- 52) A. アズィズは翌年まで日本に滞在し、後に訪日中の調査や講演をまとめた『日出づる国の三日月』（M. Abdul Aziz, *The Crescent in the Land of the Rising Sun*, London: Blades, East & Blades Ltd., 1941）を刊行した。
- 53) *The Japan Weekly Chronicle*, September 12, 1935, p. 351.
- 54) 『モスク報告書』, 昭和10年10月12日付『大阪毎日新聞』（神戸版, 5面）, 兵庫県知事湯沢三千男発, 内務・外務大臣ほか宛, 昭和10年10月28日付「神戸回々教寺院開院祝賀會開催状況ノ件」JACAR: B04012533100（第62-73画像）で約600名, 昭和10年10月12日『神戸又新日報』（7面）で約500名と報告されている。
- 55) 上掲「神戸回々教寺院開院祝賀會開催状況ノ件」には「主ナル来賓」に「埃及領事 エム, ファウジイ」とある。しかし, 昭和10年8月18日付『神戸新聞』には, 「日埃会商」の開催（於カイロ）を目前に控えて, 同領事は同月22日に横浜出帆の龍田丸で米国經由帰国の途に着く予定であること, 日本の貿易業者らがエジプトにおける日本品排撃問題に対する善処を求めて彼の送別・懇談会を大阪で開催したことを報道している。そうであれば, モスク落慶祝賀会に彼が出席できる可能性はないので, 上記報告の記述に誤りがあるのかもしれない。
- 56) Usmanova, *The Türk-Tatar Diaspora*, p. 85.
- 57) Usmanova, *The Türk-Tatar Diaspora*, p. 85. A. アズィズによると, 祝賀会の直前にクルバンガリー派のグループは（カリム兄弟社の〔インド人の〕A. Sattarに率いられた）主流派によって行事への参加, モスクへの入場を阻止されたという。A. アズィズは両者を和解させようとしたができなかったらしい。もしクルバンガリー派がモスク入場を強行していたら, 流血の事態になっただろうと言う（Aziz, *The Crescent*, pp. 22-23）。
- 58) Usmanova, *The Türk-Tatar Diaspora*, p.85; 昭和10年10月10日付『大阪毎日新聞』（神戸版, 11面）; *The Japan Weekly Chronicle*, October 17th, 1935, p. 496; 小村『日本イスラーム史』302-304頁。小村は, 有賀が「式後, 在神ムスリムより多年関西イスラーム界に貢献した功勞を表彰されレイを受けた」といい, そのレイを首にかけて親族と共に着席した有賀の写真を掲載している。
- 59) 佐久間については, 松本ますみ「佐久間貞次郎の対中国イスラーム工作と上海ムスリム——あるアジア主義者をめぐる考察」『上智アジア学』27（2009）, 115-134頁を参照。
- 60) 有賀と親交の深かった小村不二男によれば, 有賀と佐久間の間には交際があったらしい（小村『日本イスラーム史』162頁）ので, それから考えても佐久間の参加は不自然ではないかもしれない。
- 61) 前掲注54の「神戸回々教寺院開院祝賀會開催状況ノ件」; Usmanova, *The Türk-Tatar Diaspora*, p. 85; *The Japan Weekly Chronicle*, October 17th, 1935, p. 496; 昭和10年10月12日付『大阪毎日新聞』（神戸版, 5面）。
- 62) R. Clive (Tokyo), 15th Nov: 1935, "Opening of Muslim Mosque at Kobe: Muslim propaganda in Japan," F7876/42/23, FO 371/19349.
- 63) Aziz, *The Crescent*, pp. 73-78; 前掲注54の「神戸回々教寺院開院祝賀會開催状況ノ件」。
- 64) 彼の文章は, 同ミッションが発行していた *The Islamic Review* 誌にも転載された（Vol.24, 1936, pp. 2-8）。
- 65) 本節後段も参照。なお天皇のイスラム改宗や日本のイスラム化の噂は日露戦争の頃からイスラム圏で広まっていた（杉田英明『日本人の中東発見——逆遠近法のなかの比較文化史』東京大学出版会, 1995年, 220頁以降）。
- 66) 前掲注62の R. Clive (Tokyo), 15th Nov: 1935, "Opening of Muslim Mosque at Kobe: Muslim

- propaganda in Japan.”
- (67) 1872年にペシャワールで生まれた彼はアリーガル・カレッジ出身で、英国にもよく行っていた (*The Japan Weekly Chronicle*, September 12th, 1935, p. 351)。
- (68) 実際、日本のイスラム化にまつわる噂は日本の宣伝というよりは、外国人ムスリム側の幻想という面が強いだろう。また、神戸のインド商人たちが反英宣伝のために間接的支援、助成金を受けているという話も真偽は定かでない。
- (69) 「家屋」は英文で “property”, 「納税免除の土地」は “freehold land” となっている (9頁)。
- (70) JACAR: B04012533500 (第61画像から)。
- (71) 文書ではアクチュリンが「英国人」となっているが、タタール人なので「無国籍」の誤りだろう。この文書の少し後に挟み込まれた1936年5月1日神戸モスク発行の文書によれば、36-37年の幹部は「寄附行為」記載のものから変わっている。理事会は15人中5人がタタール人で残りはインド人、監事は3人のうち1人がタタール人で残り2人がインド人である。
- (72) 総会で票決権を有するのは、「本財団法人ノ社員ニシテ兵庫縣又ハ大阪府下ニ居住スル満二十歳以上ノ男子」に限られている (第三十條)。
- (73) これに直接関連するかどうかは不明だが、イスマーイル派の結婚式が神戸モスクのイマームの手で執り行われたという報道を旧稿 (31頁) で紹介した。
- (74) 「在神戸回教寺院ニ對スル法人格許〔可?〕請願ニ關シ昭和十三年四月六日附英國大使館覺書假譯」(1938年4月6日に在京英国大使館が発出した覺書を邦訳したもの) JACAR: B04012533400 (第56-58画像), 本邦ニ於ケル宗教及布教關係雜件/回教關係 (大日本回教協會ヲ含ム) 第二卷。先に引用した「在神戸回教寺院ニ關スル件」の直後に綴じ込まれた「以上ノ理由ニヨリ宗教財團設立スル事ヲ不許」で終わる出所不明の文書はこのときの通達の写しなのかもしれない。
- (75) Aziz, *The Crescent*, pp. 16-18.
- (76) 重親知左子「宗教団体法をめぐる回教公認問  
題の背景」『大阪大学言語文化学』14 (2005), 131-144頁。
- (77) この後、情勢変化に伴ってインド系ムスリムが離日し始めることにより構成は変化していくが、これについては別稿で述べたい。
- (78) OSS, R&A 890, *Japanese Infiltration among the Muslims throughout the World*, 15 May 1943, pp. 1, 15. 本資料のコピー入手にあたっては桜美林大学の中生勝美先生のお世話になった。
- (79) Paul H. Kratoska, “The Perils of Propaganda,” Jan van der Putten and Mary Kilcline Cody eds., *Lost Times and Untold Tales from the Malay World*, Singapore: NUS Press, 2009, pp. 97-113.

DONATIONS RECEIVED

From Muslims for THE KOBE MUSLIM MOSQUE up to the 31st, March 1936.

From: Mr. I. B. Ferozzuddin ...	¥ 66,000.00	¥ 1,000.00
" " M. A. K. Bochia ...	351.00	834
" " S. M. Bahir ...	650.00	595
" " A. S. Baig ...	101.00	245
" " Vally Noor Moham-		128.46
" " med Co. ...	3,001.00	123.46
" " A. Abdul Karim Bros. ...	13,539.19	50.00
" " Ltd. Hajj Karim Bros. ...		151.00
" " Ltd. Collections in		10.00
" " Bombay (as per list) ...	3,546.64	50.00
" " A. Ebrahim Bros., incl.		500.00
" " collections in Ran-		2,000.00
" " goon (as per list) ...	14,021.81	
" " Oriental Export & Im-		200.00
" " port Co. ...	975.00	100.00
" " N. A. Thanawalla &		50.00
" " Co. ...	851.00	12.82
" " African Trading Co. ...	250.00	300.00
" " D. K. ...	500.00	
" " I. Rahman ...	25.00	
" " A. G. Ahmed ...	251.00	
" " A. A. Bochia ...	25.00	
" " A. S. A. Panawalla ...	20.00	
" " O. J. Kasmani ...	101.00	
" " Kaw Katchi ...	71	
" " A. C. Dama ...	101.25	
" " Sulaiman, Aboon Fazal,	29.25	
" " Mamood Amint E. ...		
" " Mohamed Abdul Masjid ...	500.00	
" " Hajj Hasan Dads ...	17.58	
" " Jan Mohamed ...	251.00	
" " Abdul Sattar Ahmed ...	901.00	
" " M. Yusuf ...	25.00	
" " I. K. Farhan ...	25.00	
" " H. J. Farhan ...	250.00	
" " H. Mohamed & Co. ...	50.00	
" " S. M. Hasan ...	25.00	
" " S. H. D. Abbas ...	25.00	
" " D. Moosa ...	10.00	
" " A. L. Alden ...	30.00	
" " V. H. Toorabally ...	51.25	
" " Anonymous Donor ...	1,001.00	
" " Nondeen Mary ...	10.00	
" " Husain Jilal ...	13.00	
" " A. R. M. Farooq & Co. ...	100.00	
" " A. R. M. Farooq ...	17.85	
" " Sraajuddin Molin Ba-		
" " zar ...	11.91	
Total ...		¥ 118,774.73

We regret to announce that the late Mr. S. A. Ahmed who was deputed to travel and collect funds in India & Straits Settlements, returned as a sick man. We waited for his recovery but the gentleman died before we could get a complete list of his collections and account of his expenses for the mission.

DONATIONS RECEIVED

From Muslims for the KOBE MUSLIM MOSQUE through Messrs. Ahmed Abdul Karim Bros., Ltd., Bombay. Dated 2-7-1934.

Rs. 187-14-6 M/s. Hajj Moosa Esmail.  
2000-0-0 " Hajj Ahmed Hajj Esak.  
501-0-0 " Hajj Hasan Dada.  
128-0-0 " Habib Hajj Hasan Dada.  
Rs. 2,813-14-6

¥ 3,546.64

DONATIONS RECEIVED

From Muslims for the KOBE MUSLIM MOSQUE through Messrs. Ahmed Ebrahim Bros., Rangoon. Dated 22-12-1934.

Rs. 3,900-0-0 M/s. Ahmed Ebrahim Bros.  
674-4-9 " Miscellaneous.  
100-0-0 " Malim Bros.  
125-0-0 " M. Mohamed Ebrahim.  
70-0-0 " Miscellaneous.  
1-0-0 " Esmail Tea.  
50-0-0 " H. Mohamed H. Jij.  
125-0-0 " A. Aziz A. Hamid.

Rs. 150-0-0 M/s. Dawoodji Dabbhoy.  
125-0-0 " Hajj Vally Moosa.  
1,000-0-0 " Hassim Cassim.  
100-0-0 " H. Mohamed Ayoob.  
150-0-0 " Hajj Adamji Jiya.  
125-0-0 " Hajj Esmail Noor Mohamed.  
100-0-0 " Soolaiman H. Dada.  
51-0-0 " Ahmed Dadabboy.  
125-0-0 " Hajj Tar Haji Tayoob.  
200-0-0 " Yaccob A. Ganny.  
1,000-0-0 " Mohamed Yusuf & Co.  
500-0-0 " Hajj Teroobahmed Vally.  
175-0-0 " Abdulla Ayoob.  
31-0-0 " Hassim H. Ahmed.  
100-0-0 " Ahmed Mamujiboy.  
200-0-0 " Yusuf Md. Advat.  
125-0-0 " Hajj Ganny Soolaiman.  
100-0-0 " A. Shakoor Hamed.  
101-0-0 " Soolaiman Noor Mohamed.  
1,000-0-0 " E. C. Madhe Bros.  
100-0-0 " Satar H. Vally Mohamed.  
250-0-0 " Soolaiman Adami.  
125-0-0 " K. Moridin Bawa.  
100-0-0 " Hajj Dada Sharif.  
125-0-0 " Mohamed A. Ganay Co.

Rs. 10,626-4-9

¥ 13,321.81  
500.00 Ahmed Ebrahim Bros.  
14,021.80

BOARD OF TRUSTEES.

MR. FEROZZUDDIN  
" P. M. MASTER  
" M. A. K. BOCHIA  
" A. SATTAR AHMED  
" A. C. DAMA  
" A. S. BEG  
" G. AGIRZHY  
" G. GAFAR  
IMAM M. SHANGUNI

BOARD OF DIRECTORS.

MR. P. M. MASTER, *President*  
" A. SATTAR AHMED, *Vice-President*  
" G. GAFAR, *Secretary*  
" F. RAHMAN, *Secretary*  
" Y. ABDUR RHAMAN  
" A. R. A. CHINOY  
" G. AGIRZHY  
" S. MOTI  
" S. M. BASHIR  
" AZIZ ALI